



「大地を感じる新たなフラメンコ」 大沼由紀舞踊公演 “EspontaneaV” —Perenne (悠久)—

文・志賀信夫 Nobuo SIGA

パコ・デルシアの登場は衝撃だった。サンタナ、ジョン・マクラフリン経由で知り何度も公演を聴いた。背景にチック・コリアの『ラ・フィエスタ』もある。聴くと思わず体が動く。シンプルなコードでこれほど熱狂を生むのはフラメンコの方だ。

日本にはラテン音楽を受容する素地がある。すでに戦前に人々をとらえ、戦後のムード歌謡はラテンを背景に流行した。タンゴは五〇年代に歌手、藤沢嵐子らが本場で公演して喝采を浴びた。フラメンコも小松原庸子、長嶺ヤス子、小島章司から多くが現地で好評を博している。日本では各国舞踊を学ぶ人が驚くほどいるが、とりわけフラメンコ人口は多く、スペインを超えて世界一らしい。

日本のフラメンコ舞踊家は創作性を高め、日本文化との融合などさまざまな試みを行ってきた。一方で、フラメンコはヒターノ（ジプシー）由来として、その精神を受け継ぐ土着的な踊りに対する評価も高い。大沼由紀はそこに魅せられ、踊り続ける舞踊家だ。大沼は、

スペインでフラメンコを学ぶうちに、カディス地方のヘレスに辿り着いた。現在のフラメンコの発祥地ともいわれ、ヒターノの踊りが残る町だ。フラメンコは足の踊りだ。もちろん手と上半身の優雅な動き、そしてモカスタネットの超絶技巧もあるが、基本にはサパテアードという踏み鳴らす足の音、リズムがある。それはジプシーの踊りからずっと引き継がれているものだろう。そのため大沼由紀の踊りも、大きな特徴はサパテアードだといえる。

フラメンコダンサーは赤や黒が基調の目立つ衣装で舞う印象があるが、大沼はジプシーや洗濯女のようなでたちで、裾をたくし上げ踊る。今回の舞台も、樽が置かれたタブラオ（フラメンコ酒場）に現れた村娘のように踊りが始まり、音楽とともに次第に盛り上がる。毎晩、村で繰り広げられる光景のようだ。大沼のサパテアードは、体内から生み出されるような太い音が響き、その感覚が土くささを感じさせ、類のない魅力がある。音楽家も一流で、重鎮マテオ・

パコ・デルシアのカンテはもちろん、バルマの二人がテーブルを囲むパフォーマンスも見応えがある。男六人の力強い音楽に大沼は一人で立ち向かう。過度の演出もなしに、この「エスポンタネア」シリーズという即興性の強い舞台こそ、大沼由紀の魅力がもっとも発揮されるもので、詰めかけた観客も声をあげて熱狂した。

サパテアードを一字で表現するなら舞踏の「踏」だろう。以前、大沼由紀は舞踏を学んでいた。跳躍し、舞うバレエなどの古典舞踏に対して、まず立つことを踊りにする舞踏を経てフラメンコに至ったのは、当然かもしれない。それは大地という自然と人の真摯な対峙でもあり、土にまみれる人の営みにつながっている。ヒターノの移動生活で培われた自然観がフラメンコの底流には流れている。それを体感させ観客の心を動かす。大沼由紀はフラメンコの原点を求めることで、まったく新しい世界を創りだした。

